時期外れ、中途採用で会社に入ったらしい真壁という男は、それはそれはハイスペックな男だった。年齢と社歴としては劣る後輩ながらも、顔はよく仕事も早い。実は知識もそこそこある。俺も仕事が遅いと指摘される方ではないが、真壁と比較したら遅い方に入ってしまうだろう。

そんな後輩に、なぜかある時自分がゲイであることがバレた。原因は不明だ。だが、先輩ってそっちの方なんですか～とちょっかいを出されてしまって、うまく切り返せなかったのが運のツキ。実は向こうもその気があったらしく、奇跡的に意気投合して時々ヤるセフレ関係になってしまい、なんと現在もその関係は続いている。向こうはバリネコ、俺はバリタチなので相性もいい。

ただ俺は、そんな優秀な彼に時には無体をはたらいてみたい。

第一話　生意気な後輩の尿道を弄り倒して泣かせたい

「先輩は物足りないと思いませんか」
「何が？」
「何って言うか、刺激が？」
「セックスの？」
「そう」
　仕事でもズバズバ切り込んでくる真壁は、こういう時でもあけすけだった。というか物足りないと言われても、俺はこれが限度だと思う。あと、コイツ相手にそこまで本気のセックスなんか出来ないという側面もあるかもしれない。とはいっても楽な相手を一人失うのは俺にとってもデメリットが大きい。なので、それとなく会話は続ける。
「刺激的なの求められても。俺、入れられるの無理だぞ」
「それは僕も入れられたい派だから無理です」
「じゃあどうするんだよ」

「立ち位置の変更は一回置いときましょ！てか僕、これとか使ってみたいんですよね！」
「これって？」
　お互いの液体で若干汚れたシーツの上で寝ころびながら、真壁はスマホの画面を操作して俺に見せてきた。するとそこには、なにやらいかがわしい写真の中心に、細い棒が写っている。それを見てもピンと来なかった俺は、スマホの画像を何個か横にスライドさせて詳細を見た。
　説明写真で男性器に刺さっていたそれが、卑猥な道具なのだと理解は出来る。だが俺は恐怖を感じたので、そっとスマホを真壁に返した。
「……なにこれ」
「尿道に入れる棒？みたいなので、前立腺が内側から刺激されていいらしいんです」
「ふ～ん。普通に恐ろしさしか感じないけどな、俺は」
「え～？菅原さん、こういうの興味ないんですか？」
「あんまりない。てか自分にもついてんだから、真壁が使えば？」
「えっ？なんで先輩がいるのに僕が自分で使うの？」
「はぁ？俺に使いたいわけ！？」
「そう、僕が先輩に使いたい。これ使ってビクビクしちゃう菅原さんが見てみたい！」

綺麗な目から星を散らすように、真壁はキラキラの目線を向けてきた。だが言っているのはえげつないことだ。残念ながら、俺にこのキラキラ攻撃は効かない。もう慣れたからだ。そして俺は自分の性器は大切にしたいので、こんな道具で不能になったらどうしようという心配が先に来る。
「いやいや恐怖じゃんこんなの。ちんこに入るわけねぇし。普通に無理」
「僕だって怖いですよ。でも、か弱い僕に無理させられないでしょ？変わってあげたいと思うでしょ？」
「え、全然かまわない。真壁より俺のちんこの方が大事」
「はぁ！？信じらんないこの人でなし！ちんこ魔人！」
「なんで俺が文句言われなきゃいけないんだよ！無許可で人のちんこに棒を刺そうとしたやつにだけは言われたくない！」
「無許可じゃないです！今見せた！」
「納得できるか！死活問題だぞ！？」
「やだやだ～！菅原さんに使いたい！」
なんで、なんでと喚きながら、ベッドの縁に腰掛けた俺の太ももを真壁が叩く。それを適当に流しながら、はぁ、とため息をついた。使ってほしいというおねだりならともかく、

どうして俺がすんなり言うことを聞いてくれると思ったのかが謎だ。俺としては夜の間だけ少々我儘なコイツがちょっとかわいくもあるんだが、自分の身を守るためなら希望を断るときもある。

とは言っても、あの棒を入れたら真壁がどうなるのか、という点に関しては興味があった。けれども真壁自身も、それを自分に使うのは乗り気じゃないらしい。だから彼に使うためには、お互い合意の上での理由がいるだろう。

なので俺はぺちぺちと身体を叩くその手を握って、真壁に話しかけた。

「俺は使われたくないけど、それだけ言うなら賭けないか」

「何を？」

「その棒を相手に入れる権利」

明るいまま枕元に放置されたスマホの画面を、トントンと指先で叩く。それを見て、使ってもいいんですか？と彼が聞いてきたので、賭けに勝ったらなと俺は続ける。

「勝負に勝ったら、相手にこれを入れてもいい。負けた側は絶対相手の好きにさせる。それでどうだ？」

「それ、僕が勝ったら先輩がちんこ犯されちゃうけどいいんですか？」

「……まぁ、負けなければいい話だから大丈夫だ」

「ふ～ん。ちなみに身長以外ほぼ僕有利なスペックですけど、勝負は何ですか」
「そうだなぁ。勝負は……」
だが、この勝負の結果を俺は自分の中で想像できていた。だから本当にただ適当に思いついた、とでもいった風に真壁に言う。すると彼も一瞬きょとんとした後、そんなのでいいんですか、と言ってきたので。
負けるのが怖いならこの話はなしになるけどと返せば、やるに決まってる！なんて意気揚々と言う顔を見て俺は笑った。

というわけで、勝負をけしかけたのが先週。そして本日、その結果が出た。
「うわあああああん！やだやだやだあああ！あんなの絶対入らない！」
「賭けには俺が勝ったんだから文句言うな」
「ズルい！僕は認めてない！」
泣いている真壁を引きずって、俺はその辺のホテルに入ってベッドに放り込んだ。そしてバックからお目当てのものを取り出して準備を始める。

「まさか菅原さんがあんなに指相撲強いなんて……！聞いてない、絶対得意だからその勝負にしたんでしょ！？」
「勝ちは勝ちだろ。三回勝負の二回ストレート勝ち、泣きの五回戦にして俺は五回勝ったぞ」
「オーバーキルっていうんですよ！そういうのは！」
　俺たちが権利を賭けて勝負をしたのは指相撲。理由は俺が得意だったから。無論真壁は俺の特技など知るはずもないので、喜んで勝負内容を受け入れた。ただし、二人だけで勝負すると公平性に賭ける。なので対外的には、この勝負に負けたら俺たちの所属するチーム全員の昼飯を奢るという内容で決行した。彼らにとっては得しかないない勝負の行方は、全員が見ていたと思う。というわけで全敗した真壁は、本日の昼食代数千円とちんこの犠牲を負ったことになる。
　だが奢りはともかく、尿道用の棒が使われることを真壁はひどく拒んだ。俺も逆の立場ならきっとそうなるだろう。なのでそれを見越して、今日は色々用意してきていた。
「暴れるな」
「無理っ！無理なものは無理！」
「うん。そう言うだろうと思ってこれも用意した」

「げっ！？」
　ジャラリと取り出したのは、腕と足の自由を封じる拘束具だ。それを見て真壁は顔を青くし、ベッドから逃げ出そうとしたが、さくっと馬乗りになって動きを止める。ぐぅ、と苦しそうな声が出てきたのを無視し、手を拘束してベッドの上部に固定した。
「ひどい！先輩の外道！」
「うん、今日の俺は外道になるわ」
「ならないでよ！僕は普段の先輩が好きなのに！」
「まぁまぁ、たまには違う刺激が大事だろ？てことでさっさとスーツ脱ごうな」
「やだあああ！！助けて！今度一回先輩の好きなプレイに付き合ってあげるから！」
「別に付き合わなくていいからちんこ出せよ」
　ピーピー泣いてる真壁の上着のボタンを全部はだけて、下の衣類を全部脱がせる。そのあと首輪を付けて、太ももにはめたベルトと首輪を鎖で繋げた。間抜けに足を開いた状態になった真壁は、変態！と俺をなじってきたが心は痛まない。
「なにこれ！本当に最低！菅原さんのムッツリ！」
「俺なりに刺激が欲しい後輩に配慮した結果」
「これのどこが配慮なんですか！？」

「はいはい、文句は後で聞くから」
「はぁ！？この鬼！ろくでなし！っ、ちょ、ほんとに取って、くださ……っ！」
　俺も真壁のことを傷つけたい性癖はないので、一応使い方は勉強してきた。なのでやり方に沿って、ローションをたんまり性器にかけていく。入れる前にもアルコールで消毒して、初心者向けらしいシリコン製のそれをゆっくり入れていった。それを恐る恐るといった目で、真壁も見ている。
「どう？痛いか」
「うう～！わ、分かんないですけど、怖いぃ……」
　ガチガチに強張る身体は、どこをどう見ても気持ちよさそうには見えない。だが真壁いわく、前立腺を内側から刺激する道具とも言っていたし、まだ途中にあるうちは微妙なのだろうか。そんな疑問を浮かべながら、ゆっくり、かつ確実に中へと挿入していくと、こつんと何かに当たった感触がした。お、ここか？と思いながらトントンと棒を動かすと、突然真壁の拘束された太ももがガクンと動く。
「うあっ！！？」
「なぁ、ここまでで止まるっぽいんだけど。何か変わった感じあるか」
「っ、っっ！！」

けれど明らかに異変が起こっているはずなのに、真壁は唇を噛んで首を横に振った。あれ？一時的にビビっただけで、特に変わらないのか？それともう少し奥までいけるのか？と、よく分からないまま俺は棒をグリグリ押す。
「ひっ、ぎっ！！」
「これ今どうなってんの？黙ってたら分かんねぇんだけど」
「や、ばい、も、ヤバいから、抜いてくださ……！」
「やばいってどんな感じ？」
「〜〜〜っ！いいから早く抜いてくださいよ！もう抜いて！」
「痛いってこと？」
「ん、ぅ、そ、そう、痛い、痛いからっ！」
だがこの問答が終わる頃には、俺は真壁が既に頬を赤くして、どうにかこうにか快感を逃がそうとしているのが分かっていた。ただ異物感はあると思うので、本当に感じているのかは確信がもてない。なのでもう少し、怪我をしない程度にコイツで遊ぶことにする。
緩く奥へ奥へと棒を押し込むと、ぐぐっと連動してしなる身体は、どちらかというと感じているように見える。だから俺はきっと痛くはないはずと信じて、そのまましつこく奥を弄る動きを続けてみた。

「ん〜、俺には痛そうには見えないけどなあ〜」
「はぅぅぅ……ッッ！！？っ、あ、ぁ、な、に、なに、して……！？」
「ココとか、ちゃんと勃ってきてるし？奥のとこ突くとビクビクしてるし？」
「く、はぁ、はぁっ、ぁぁぁぁ……！！」
「どっちかって言うと、気持ちよさそうに見えるけど？」
「ッッ！！」
　先ほどにも増して唇を噛みしめ、俺を睨むその目が既にうるんでいる。震える熱を指先でくすぐれば、喉からふり絞ったみたいな詰まった喘ぎ声が聞こえてきた。コンコンと奥を小刻みに突いて刺激しながらカリの所を集中的に指先で擦ってみると、ガシャン！と大きく鎖が鳴る。辛抱できなかったのか、真壁はとうとう口を開き、本格的に喘ぎ始めた。
「ぅ、っ、ーーーっあぁぁぁぁっ！！ひぁっ！あぁぁ、だめっ、もうだめぇ……っ！！」
「なんだよ、ちゃんと感じてんじゃん」
「こ、こんなっ、ぅう、気持ちいいのレベルこえてますから……！やばい、ぁ、あ、ほ、ほんとに、ヤバいぃぃッッ！！」
「そっかそっか。じゃあお前の好きな弄り方したらもっとヤバいな〜」
「ぃあああぁぁっ！！？？ダメダメダメ、っあ、ああぁぁああ！！！！」

棒を意識させるように真壁の熱の筋に親指をあて、ゆっくり上下に扱いてやった。先端の穴のまわりも、時々くるくる撫でまわす。なんとか動きを拒むため内またになろうとしているのか、快感を逃がそうと足を伸ばしたいのかは分からないが、しきりに鎖から音が鳴っていた。だめ、もうだめ、なんて言いながら俺を見つめる顔はグズグズだ。真壁にしては珍しい反応に、俺もつい調子に乗る。

「ほらほら、いいんだろ。もっとかわいく気持ちい〜って言ってみろよ」

「ひぐっ、ぁ、っ、変態ぃぃ……っ！いうわけ、なっ、ぁ、あ！」

「あっそ。じゃあ俺変態だからもう少し激しくしても文句ないよな？」

「あううぅぅっっ！！？？っく、ぁ、ああ、も、あ、あ、あっ、ひっ、ううぅぅうぅぅうう……ッッ！！！」

「感じる？このいう無理やりなの結構好きなのお前」

「ふぎっ、ぃ、いぁ、あああぁぁぁぁ……ッッ！も、ぁ、だ、め、ううっ、ンンンンっっ！！！！！」

けれども面白がって棒を上下に抜き差ししたら、今度こそ本気で真壁の下半身が痙攣し始めた。あ、これ流石にヤバいやつか？と思って手を離したが、それでもガクガクいってる脚が落ち着くことはない。それをしばし眺めていたものの、あまりにも状況が好転しないので彼に問いかけてみた。

「……なぁ、今もしかしてイッてる？」
「はぅっ、ううっ！ぁ、わ、かんない、です、もう抜いて、助けて、くださ……」
だが俺は単純に真壁の状態が知りたかっただけなのに、彼はとても弱々しく返答してきた。あの真壁が助けてと言うなんてと、むしろ感動すら覚える。勝気な彼にここまで言わせるとは、この棒恐るべし。すごい器具だ、今度他の種類を使うのもアリかと思いながら、俺は真壁の中に入っているそれを先ほどより上に引っ張る。すると真壁は尿道の隙間から、精液と思われる液体を軽くこぼしていた。その刺激か、射精感かで真壁は声をあげる。ぴくん、ぴくんと身体を微弱に跳ねさせながら、小さく喘いでいる様子はあまりにも煽情的だった。
「ん、ん、っ、ぁ、ぁぅ……」
トロンとした目で棒が出て行く様子を眺めながら、真壁はおそらく何度もイッているのだろう。俺がそれをじっと見つめても、文句の一つも言われることはない。若干早く上にひけば、声が大きくなる。その姿がエロすぎて手を止めれば、早く抜いて……と言いたげな目を俺に向けてきた。真壁の切羽詰まった顔を見て、俺の中心も徐々に張りつめていく。
あの強気な真壁が、俺にチンコ弄られて、それでこんなにエロい反応見せてんだなと思ったら、ここで終わるのがもったいないと名残惜しくなった。だから彼の絶望を横目にしな

がら、俺は棒を内部深くまで押し戻す。真壁がもがこうともお構いなしに。
「ひぁあああぁぁっ！！？あっ、あ、ぅ、なんでっ、やだ、抜いて、くれるんじゃ……！？」
「いや、なんかこのまま後ろも弄ったらどうなるか気になってな」
「っっ！！？？そっ、そんなの絶対だめっ！」
「負けたら言うこと聞くって約束だろ？俺の言うことは絶対だよな？」
「やっ、だめだめ、入れちゃ、ぁ、ぁ……ッッ！！」
「さて、そしたら真壁の気持ちいいとこ、前と後ろからコリコリしてこうな？」
「んぃ、いっ、ぎ……っ！！！」
　どうせ今日は俺の好きにしていい約束なんだから、とことんやるのもきっと面白いに違いない。そう思った俺は、後ろからも前立腺を弄ってみることにした。真壁の前立腺の位置なんて、目をつむっても分かるくらい弄り慣れている。いつも通り早々に弱点を見つけたので、中指の腹で擦ってやった。自由度の低い身体を左右にくねらせながら、真壁はなんとか快感を逃がそうと必死になっている。それを許さない俺が指を二本に増やす。そしてしつこいくらいに前立腺を擦って、時々彼の熱から出ている棒の先をトントンと叩く。それだけで真壁の身体は、面白いくらいに弾んだ。
「はあうぅぅぅ……ッッ！！んぁ、あ、あ、だめ、それだめええっ！」

「感じまくってるくせに何がだめなんだよ？」
「う、ぁああっ、あっ、イッ、て、る、もう、ずっと……！」
「イッて悪いなんて言ってないだろ？あぁ、違うか。もっとイキたいの間違いか」
「っ！！！？ちが、あ、ああ、ひっ、ぃ、っあ、あぁあぁぁ！？だせ、ない、出せないからっ！そんなに弄っちゃだめだってばあああああっっっ！！」
ビクビク腹を波打たせて、塞がれた出口から精液を必死に出そうとするさまはかわいそうだが、なんとも興奮を煽ってきた。くちくちと膨らんだ前立腺を優しく擦っても、強めに押しても、ダメとかイクとか言いながら反応を返してくるのが面白い。全身を赤くして、感じている様を表現しているのもエロい。
職場では王子だの、イケメンすぎて尊いだのと言われてもてはやされる真壁の裏の一面を、あの会社で俺以外に知っているのだろうか。こんな風に無様に喘いで、尻を突き出して。挙句の果てには指や棒を突っ込まれて、ひたすらに感じさせられているなんて。
もしかするとこの姿を知っているのは自分だけかと思うと、ついつい悪戯な手は止められなくなる。真壁自身の限界などどうでもよくなってしまう。俺だけという優越感が、心を埋め尽くしていく。
「もっ、もおだめええっっ！！はぅ、うううっ、お、かしく、なる！変になっちゃ……！」

「お〜、なれなれ。変になっちまえよ」
「やあああああぁぁああっ！！お〜〜〜〜っ！！！んぅぁあああああぁぁあああ！！ッ、ひっ、ぁ、こ、われ、ちゃ、あぅ、ぅぅうううっっっ！！！！！」
激しく前立腺を擦りながら、くるくると尿道から出た棒を回す。すると真壁は、手錠を壊すんじゃないかってくらい暴れていた。だから俺はあえて、出口をちらつかせてみる。彼にとって希望となる言葉を、優しく耳元で囁く。
「ひっ、ぐ、ッッ、も、もう助けて、イカせてっ！」
「イカせてほしい？もう抜いてほしい？」
「んん……！」
「きついな、辛いな。ごめんな、無理させて」
「はぅ、っ、あ、ぁぁ……！ぬ、いて、早く抜いて、くださ」
「うんうん。じゃあ取るからな？力抜いてろよ……」
「ん、ぁぁぁぁ……！」
俺の言葉に素直に頷いて、真壁は強張っていた身体の力を抜く。抜けやすくなったそれを、徐々に上に引いて。あと残り一センチくらいになったところで、真壁、と声をかけた。そして後ろから指を抜いて、俺の声に反応して律儀に目線をくれた顔を撫でて、次に頭を撫

でる。その拍子にほころんだ真壁の目を見つめて、そっと耳元に手をあてた。期待を胸いっぱいに抱えた顔。そんな純粋な真壁に笑いかけて、俺は容赦なく棒を奥まで突っ込んだ。
「……嘘。やっぱりまだ抜かない」
「ーーーーーっ！？ぅ、……あっ！！！」
ずるるっと戻るそれに、不自由な身体をエビ反りにして悶える様が最高だった。かわいいから実況してやる。首を振って逃げようとしても逃がさない。顔を押さえて、俺の声から逃げられないよう固定する。
「すっごい限界って感じがする。真壁のココ見てみ？めちゃくちゃ震えてんの」
「だ、から、限界、でぇ……っ！ぁあ、あ、も、無理、って……！」
「じゃあ今度こそ抜こうか？」
「っ！お、お願いします、本当に、ほんとにこれで最後に」
「あぁほら、抜けてく抜けてく……」
「ひぅ、ぅ、うっ、んんんん～～～～～……っ！」
「なぁどうする？次はちゃんと抜いてほしい？」
「んん、っ、ぬ、いて、もう入れるのやだ……！」
「じゃあ俺に何してほしいのか自分で言えるな？」

「なっ、何回も、言った！」
「そう。まぁ別に言わないならそれでもいいけど、また入れれるぞ？」
「やっ、やだ、もうやだっ！やだあっ！！！」
「じゃあほら、言えよ。具体的にな。何をどうして欲しいのか言え」
「うぅぅぅ〜〜〜〜っ……！」
　プライドの高いコイツが、卑猥なおねだりを言いたくなさそうに俺を見ている。けれど先端近くまで抜いては入れるのを何度か繰り返したら、叫ぶように嫌だ、ちゃんと言うから、と口にした。だから俺は真壁が喋れる程度に刺激を弱めて、会陰のあたりを指先で淡く押しながら先を促す。
「はぁっ！あっ、あ、あぁ……！」
「さて、ラストチャンスだぞ真壁。何をどうして欲しいんだよ？」
「僕、の、に、入ってるのを……！」
「僕の何に？」
「ちんこ、にっ！」
「うん、ちんこに入ってるのを？」
「抜いて、射精、させてくださいっ！」

「へぇ、そんなにイキたいんだ。この中にたまってる精液全部出したい？もう楽になりたい？」
「あっ、ぎ、ぃっ、ッッ、も、ぉ、助けて、抜いて、抜いてくださいぃぃっ！！僕もう、ほんとにおかしく……っ！」
「そっかそっか、じゃあおかしくなってれば？」
「んんんぁあああぁぁぁっ……！！？？あぐっ！？ッ！！ッッ！！！？？」
　でも言ったら解放されると思っていたようだが、俺は何をしてほしいか言えとは言っても、言ったら抜くなんて約束はしていない。彼の言葉があろうとなかろうと、俺にとってはどうでもいいことだった。ただ、え、言ったのになんで？抜いてくれないの？イケないの？と絶望している真壁の顔は最高にきた。思わず俺も昂る。別にサディスティックな趣味は無いつもりだったが、真壁相手だとこうなるらしい。
　素早く抜き差しした時なんて、真壁は呼吸が出来ないくらいイッていたと思う。それでも強引に前立腺を押し込んで、強烈な快感で叩き起こして、逃げる時間も休憩も与えなかった。
「は、ひぃぃッッ！！ぃぎ、っ、……っ」
「……おいこら、勝手に落ちるな」

「んぁああっ！！！？？あ、ぁぁぁ！」
「ったく、体力ねぇよな。次に寝たらもっとえげつないことするから」
「うっ、ぅう、ご、ごめんなさい、も、う、しない、からぁ……！許して、許してください、ぃっ！」
「許して欲しいなら頑張るしかないかなぁ？」
「ぅぅうぉぉぁぁぁぁっ！！！？あっ、あぁ、っぐ、ひ、イッ、ううううぅっっ！！ッッぉぉぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！もうだめ！イキたい！出したい、出した、あああぁぁあああぁぁぁっ！！」
「出せなくてしんどいな？でもほら、これ勝手に寝落ちしようとした罰だから。お前が悪いんだから誠意見せないと」
「ひぅっ、ッッ！ご、めんなさい、ごめんなさいいいっ！でも僕、も、もうほんとに、限界、でぇっ……！」
「なら限界越えて頑張れよ」
「――――……っっっ！！！ぁあああぁぁあっっ！！やだやだやだっ！もう無理、イッ、イク、また、っひ、ぃぃぃぃぉぉぁぁぉぉぁぁぁぁぁぁ！！！」
無駄に応援したり怒ったり、頑張れと何度も言っては、真壁を酷に責めた。そうすると

彼は、ごめんなさい、許して、助けて、もうイカせてと泣いてくるもんだからかわいくて仕方がない。おかげさまでもっといじめてしまった。彼の愛らしい顔は生まれ持ったものだから、これは不可抗力だと思う。恨むなら生んだ親を恨んでくれ。俺は悪くない。

とは言っても、コイツも人間だ。イケないままに苦しめているので、そろそろ本人の言う通り限界だろう。なので遊びたい気持ちもあるが、彼の頑張り次第では終わってやってもいいと思い始めた。

「よしよし、よく頑張ったな。じゃあ真壁もしんどいみたいだし、俺がイケたらとってやることにする」

「??す、菅原さんのを、舐めたらいいって、ことですか?」

「いやいや、舐めなくていいよ。ちょっと動いてくれればそれで」

「うごく、って?」

ようやく解放の兆しが見えたことで、虚ろだった真壁の瞳に少々理性が戻ってきた。そして喘ぎ過ぎて若干かすれた声で、俺に聞いてくる。ただし彼の思い描く俺のイキ方は、俺の理想像ではない。だから手と両足の拘束を外して、真壁の身体を少し持ち上げる。そのまま上半身を起こして、俺は彼の股下に寝ころんだ。そして緩んだ拘束を直して、今度は真壁の背中で彼の両手だけを固定する。今さら遅いが俺の股間を挟んでまたがるこの体勢

で、真壁は何かを察したらしい。ヤバいかも、と声に出さぬままに顔を青くした彼は、この期に及んで逃げようとした。その身体を掴んで引き戻す。
「じゃあ、俺の上で動いてくれるよな？」
「っ、こ、このままで……！？」
「脚は動くだろ？」
突然強要された騎乗位に、真壁は怖気づいていた。わなわなと身体を震わせて、まだ入っていないのをいいことに腰を引く。それを許さない俺は、ぎゅっと棒の刺さったままの熱を握った。
「うぎっ！！」
「何逃げてんの？」
「っ、だ、って……！こんなの無理に」
「じゃあ取れないぞ、これ。いいのかよ、俺抜かないけど。こうやって遊んじゃうけど」
「や、あぁぁあああああ！？っ、だめだめっ！それはほんとにダメだからぁあっ！！」
「あ～あ、真壁が我儘だからココ大変なことになってる。せっかく譲歩してやったのに」
「んぁっ！あっ！っ、ッッ、ひ、ぁぁぁぁぁあああああ……っっ！！！」
浅く棒を抜き差しすれば、真壁はガクガクと全身を揺らして悶えていた。それをものと

もせずに続ければ、とうとう首を振って再び泣き出してしまう。
「っ、ごめ、なさ……！動けない、こんなの絶対動けないですってぇ……！」
「へぇ。ならちんこ使い物にならなくなってもいいの？」
「ひっ、く、ぅう……、許してください……！僕もう、刺激欲しいとかいわないから」
だが許さずにいじめていれば、あの真壁が泣きながら謝ってきた。しかも自らの発言に非があったと認めるのは貴重だ。普段なら何があっても俺のせいにするくせに。いやでも、今回に関してはやりすぎな俺にも悪い部分はあると思うんだが。まぁ真壁が自分のせいだと思っているなら、もうそれでもいい気がしてきた。
そうだな、これは真壁が悪い。だからもっと追い込んでもいいに違いない。
「ふ～ん。本気でごめんって思ってんの？」
「思ってる！思ってますからもう……」
「でもなぁ、お前いっつも生意気だし。実際はどうかな～」
「ひぅぅうううっ！！」
少々こじつけな気もしたが、真壁が生意気なのは事実だ。だからこれは半分教育に近い。先輩には正しい態度で接しないと痛い目見るぞと、そういうことだ。だから俺は真壁の謝罪を後ろ盾に、棒の先端を突いた。それでひっくり返りそうになる腰を押さえて、動かな

い真壁に変わって俺が入れてやる。俺は優しいので、動けないとかほざく彼をいたわって自分で動いた。ごり、ごり、と前立腺も押して、快感を更に追加する。
ただし今ですら泣いて謝るレベルなのだから、真壁からしたら拷問に近いほどの刺激になっているはずだ。案の定、泣く勢いを増して俺にすがってきた。
「ひぐっ、ぅ、っっ、ぁ、あぁぁぁぁぁ……!!!お、お願いします、助けて、も、もうっ、壊れちゃうううう!」
「いっそ壊す?もうお前コレいらないもんな?」
「やだっ!そんなのやめて……壊さないで……!やだ、やだぁ……」
だが俺がぎゅっと彼の性器を握ると、さすがに恐怖が快感を上回ってきたのか、声は徐々に弱々しくなった。彼にしては随分としおらしく、かわいらしい行動じゃないかと余裕の俺は真壁を観察する。でも、コイツはこう見えて結構タフだ。別にもっと泣かせてもいいんじゃないか?という気持ちになったので、カリに前立腺を擦りつけるように腰を動かす。ひっ、と短い悲鳴を上げて腰を浮かせようとした罰として、前に刺さっている棒を緩く上下させた。
「ほら真壁〜?頑張って動かないと。ここまでお膳立てしたならいけるだろ?」
「はぎっ、ぃ、や、ぁぁぁぁっっ!!ほ、ほんとうに無理だからぁあああっ!ごめんなさ

い、ごめんなさいいぃぃっ！！！」
「じゃあここ、もう壊しちゃおっか？いらないんだろ、コレ？」
「やだっ！そんなのやだあああぁぁあっ！助けて、許してええっ！」
「やだとか無理とかさぁ。じゃあ何ならできんの？俺の言うこと一つもできてないじゃん」
「っ、だって、だってぇ……！動けない、もうできない、こんなのできないよぉぉっ……！！」
けれどいじめ過ぎが災いして、真壁は本当に倒れてしまった。俺に折り重なるようにぺたりと顔と胸を付けるようにへたれこんでいる。ぴく、ぴく、と身体を震わせて、俺の胸を濡らすその姿は少しかわいい。が、段々彼もバグってきたのか、普段とは違う言動が始まる。
「ひっ、く、イッ、ちゃう、ずっと……！」
「だからそんなの知らな」
「もっ、もう、おかしくなる、助けて、菅原さん、菅原さん……こんなのもうやだよぉ……！」
「おっ、おいおい何だよ急に、お前そんなキャラじゃ」
「うぅ……！」
いつもは俺に甘えたりしないくせに、真壁は額を胸にすりすりと擦りつけてきた。おいおいお前、そんな甘えたキャラじゃないだろ、いつもはもっとつんけんしているくせにと心中では突っ込むが、心と相反して俺の自身は大きさを増していた。俺の方も身体が正直

でビビる。
　調子が狂いそうなので、たまらずおい、と声をかけた。すると真壁は焦点の定まらない目で俺を見て、ひぐひぐ泣いて、もう無理と言ってへたり込む。
「おねがい、します……。僕もう、ちゃんとイキたい……です……。イカせてほしい、菅原さんに、菅原さんにしてほしいよぉ……！！」
　涙を擦りつけるように、限界って感じで上げた顔を見て、俺は目の前が一瞬弾けた。なんだその真っ赤に充血した目は。だらしなく唾液をこぼす口は。下がった眉のせいで年下の愛らしさが倍増しているじゃないか。
　なんだよ、コイツよく見たらめちゃくちゃかわいいな。あとエロい。
　不思議なことに、俺は今になってあの真壁にとてつもなく欲情している。抱きつぶしたいと心の底から思ってしまった。もっといじめたい、もっと鳴かせたい。
　あれ？なんか新しい扉開いたかもしれない。
　そう思ったら、衝動的に真壁を押し倒していた。上にいた彼がベッドに寝ころんで、大きく足を開く格好になる。ぽかんとした真壁が俺の下にいるのを見て、自然と肩に置いた手に力が入った。なぜか息が荒くなる。
「え、何、なんで」

「いや、なんか新しい扉開いたみたいで。ちょっと……、じゃないな、かなり興奮してる」
「へ？と、扉って、な、ぁああ――……ッッ！！？」
手始めに、自分の熱をガツンと奥まで突き入れた。それに背を弓なりにしてもがく真壁を押さえつけて、ひたすらに腰を振る。頭がぼうっとして、真壁が何か言っているのも耳に入らない。
「はぁ、真壁、真壁……っ！」
「あ、あ、あ、っ、ん、ん、んんっ、んんん～～～ッッ！！？っや、ぁ、イッて、る、もぉ、イッた、からあぁぁあっ！」
「なんか、やばい、止まんね……」
「くぅっ、ぅ、う、ぅぅ――――――……っ」
抵抗しているらしい真壁を無視して、俺はバカみたいに彼に欲望を押し付けていた。その中でもいい場所を一応選んで擦ってやるのも忘れない。それに反応した真壁の中が締まって、なお気持ちがいい。
「あ～、すっごい、真壁の中よすぎる……！」
「はっ、はっ、あ、ひ、ぃっ、ぃ……」
でも正常位でガンガン腰を押し付けていたら、かひゅ、と危ない呼吸をさせた後、真壁

から不意に力が抜けた。あ、ヤバい、コイツ失神するかもと思ったので、後ろから強めに前立腺を押しながら、抜くのをためらっていた棒を一気に引き抜く。
　するとびゅるっと吹き出てきた液体と同じくらい元気よく、真壁の目が見開いた。それに笑いかけて、くりくりと彼の先端あたりを弄る。
「ふえっ、えっ、あ、あーーーっ！！！？」
「目ぇさめた？悪かったな、いっぱい我慢させて。ほら、もう好きな時にイッていいぞ？」
「んんぃいいいっっ！！！？？ッ、あ、あ、あ、あ、やっ、で、出てる、うううっ！」
「頑張ったご褒美。ほらイケイケ、もっと出せよ」
「うぁぁああっ……！！！だめだめ、あっ、ぐっ、止まっ、あぁぁぁぁあああぁああ！！」
　びゅる、びゅる、と真壁はたまっていた精液を放っては、自らの腹に貯めていた。エッロ、と呟くと、目をつむって首を振る。狙ってんのかよといいたくなるほど俺のツボにハマることばかりする真壁のせいで、俺の腰も止まることはなかった。
　だが最初のうちはある程度勢いを付けて出てきたそれも、次第にだらだら零れるだけになっていく。ただし長時間我慢させていたせいか、弱まっても垂れ流したままだ。出続けるそれが面白くて、興味本位で扱いてやった。するとまた少し彼の快感の証が飛び散る。悪戯

に精液を塗り広げるよう腹を撫でてやれば、それだけでも感じるのか身体を無理にねじって悶えていた。
「はぅ、ううううっ！！も、やだ、やだあああっ！！死んじゃう、こんなに出したら……！」
「死なねぇよこんくらいで。ここも嬉しそう」
「んぎっ！？？やだやだっ！触っちゃやだあっ！」
「ヤダじゃなくて嬉しいです、だろ？」
「ダメダメ、だめ、あぁ、あ、あ、っ、ぎ、来ちゃう、来ちゃううっっ！！」
「来る？何がくんのか分んないけどおいで、ほら」
「ッッ！！！？？」
　けれどもあまりにも暴れ始めたので、俺は抱きしめることで真壁の抵抗を拒んだ。よしよしとあやすように頭を撫でるふりをして、単純に抱えてベッドの上でもがくのを止めさせる。普段はあまりしないが、今日は気分が乗ったのでキスしてやった。
「ふっ、んっ、ンンッ！！」
「ん、ふ……、あ～、来ちゃう来ちゃう。真壁のヤバいのが来ちゃうぞ～」
「はっ、ぎ、ぃ、～～～～～～……ッッッ！！！」
　もちろんその間もしつこく内部の弱点はこねくり回しているし、なんだったらにゅく、

にゅく、と真壁の先端部を包んで揉みこむ。するとそれでも逃げたくなったのか、真壁が俺でも押さえが効かないほど暴れ出した。でも暴れても結局、体格差もあって逃げられない。なのでどこか悔しそうにしながらも、彼は全身を突っ張らせて限界を迎えた。

「うあ、あああああっ！！んも、ぉ、だめええええっ！！」

「うわっ！？」

大きな声と共に、彼は自分の熱から勢いよく水っぽい液体を吐き出していた。それに俺も唖然としたが、手がすべってまた先端を擦った瞬間、再び噴き出す謎の液体。さらさらしたそれが精液ではないのは確かだ。だが、だったらこれはなんだ。俺の常識の中で、その穴から出てくる液体は二種類しかないぞ。となると、これってヤバいやつなのか。もしかして俺、何かやらかしたんじゃないか？と一瞬不安になったが、顔を真っ赤にした真壁がだめ、触らないで、なんてしおらしく言ってくるもんだから手が勝手に動いてしまった。

うん、もうなんでもいいか。なんかコイツも気持ちよさそうだし、きっと問題ない。ぐったりしていて抵抗も出来なさそうだったので手錠も外した。恥じらいか、本気の抵抗か分からないが、俺の腕を掴んできたのも無視する。その程度で止まれるわけもない。

手を動かす限り、水のような液体はどんどん出てきた。けれどそっちに意識がいっている真壁を嘲笑うように奥まで突き上げてやれば、悲鳴にも似た声を上げて喘いでいた。

たまに乳首をつねってやれば、中もしまって最高にいい具合だ。思わず何度もキスしてしまった。自分が予想外にノリノリなことにビビる。
「んぐっ、ぅ、ううっ、ぁ、あぁぁぁ……っ！！だ、め、菅原さ、ん、も、助け」
「はぁ……やばいわ、今日のお前最高」
「ふ、え……？」
「ずっとこういうことしてたくなる」
「っっ！！？」
けれど溶け切ったはずの真壁は俺の声を聞いた後、内側をぎゅっと収縮させた。そしてフルフルと震えながら、小さく、あ、あ、と言って脚を跳ねさせている。その様子はまるで女性の絶頂にも似ていたので、首を傾げながら真壁に聞いた。
「あれ？お前今イッた？」
「っ、ん、ち、ちが、うぅ……っ！」
「じゃあ何が違うのか言ってみ？」
「はう、んっ、ぅぅぅ……っ！！」
「ほら、教えろって。イッた？イッたんだろ？」
「や、や、動いちゃ、だめ、今だめ、なんかダメだからあああっ！！」

ゆさゆさと腰を前後に動かせば、その程度の動きでも首を振ってイキまくっていた。絶頂を堪えようとして、我慢がきかずに身体を突っ張らせる。そして脱力したいのに、俺が動くせいでまた快感の渦に飲み込まれていく姿は、それはそれはエロいものだった。思わず腰を動かして、真壁の奥を狙いにいってしまう。せわしなく動く真壁の腰を掴んで激しく自身を打ち付ければ、シーツをかきむしって快感に酔っていた。

「んんあああぁあああッッ！！！はぁっ、あ、あ、あ、あぅ、ううっ！イッ、ぁ、あ、うぅぅぅぅっ！ひ、ん、じゃ、死んじゃう、やぁ、もう、もうやっ……！」

「あ～、エロい。俺もヤバいって。真壁のせいで全然止めらんないわ」

「僕、の、せいじゃ」

「とか言って、お前もイキまくってるくせに。ほらもっとエロい声出せって……」

「～～～～っ、うぅぅう～～～～っっ！！だめ、そこで喋ったら……！」

「気持ちいい？真壁……」

「ふ、ぁ、ぁぁあぁぁ……ッッッ！！！」

ドロドロの真壁を更に溶かしてやろうと、いつもならしないが耳の近くでエロい言葉をいくつか囁く。すると耳に手を当てて、ヤダヤダ言いながら真壁は首を振っていた。それを見て、なんだなんだ、耳も意外と弱いのか？と俺は楽しくなった。だから強引に手を引っ

ぺがして、邪魔な両手を握りしめてシーツに押し付ける。そして責めやすくなった耳を舐めたり、耳元で喋りかけるとイクのが面白くてついつい遊ぶのが止められなくなる。
「ん、かわいい、エロいよ真壁……」
「や、や、だ、言わない、で……！」
「中痙攣しまくってる。イク？ずっとイッてる？俺にされてイッちゃう？」
「んぅっ！っ、く、ぁぁぁ！ぁ、あ、やっ、イッ、ちゃうから、もう、もうっ……！」
「凄いのここ、俺のことぎゅっと締めてきて、もっともっとって動いてる。いいとこ擦る？気持ちいいの、ずっとしてやるの好きだろ？」
「あ、あ、ぁぁ、それ、だめ、ダメなやつ、で……っ！」
「こら、逃げんな。いい子にしような……？」
「んんんん〜〜〜〜〜ッッ！！？あぁぁぁっ、だ、だめ、っ、イッ、く、ぁ、気持ちい、の、もう、終わり、終わりぃいいっ！」
「ん？だめ、終わらない。真壁がイクのも終わんない」
「ひぃぃいいぃぅうう……っっ！！！はっ、ッッ、ーーーーっ！！っぁあああああぁぁあ！！！ダメダメダメっ、ひっ、っ、くううううっ！！」
　じゅっと耳を吸いながら、いい所をゆっくり擦られるのが真壁のお気に入りらしい。こ

れをやると身もふたもなくよがっていたので、しつこく続けてみる。ぱた、ぱたっと、先ほど出していた透明な液体ばかりが出てきているが、ところで真壁は射精出来ているんだろうか。だがコイツが射精できなくなったところで俺になんの被害もないので、放置を決め込む。

しかし忘れていたが、コイツはとにかくタフだ。そしてメンタルが鋼であり、ちょっとやそっとのことではへこたれない。今回に関してもまた同様だった。

「んぅ、うううっっ……！菅原、さんの、ドS、鬼畜っ！あぅ、つ、次は、絶対、僕が勝って、ひぃひぃ言わせてやる！」

「あぁそう。まぁなんでもいいよ、今日楽しいし。ってことで、口答えのペナルティでまたコレ入れよっか？」

「ッッ！！！？？さ、さっきは頑張ったから好きな時にイッていいって」

「気が変わったんだよ。どうせまだ元気なんだろ？だったらもうひと頑張りしような」

「はひっ、っ、やだやだやだっ、やっ、――――ッッ、ぁ……！！！」

だからその心をへし折ってやろうと、俺は再び悪魔の棒を手にする。そして散々いじめてやった穴めがけてもう一度突っ込んだ。けれどそれを入れたら、あまりの快感で真壁の意識が飛んでしまう。

あ、やりすぎたなと僅かに反省したが、まだ俺はイッてなかったので強引に起こして、結局俺がイクまで付き合ってもらった。

体験版おわり